

---

# 空の落書き

綾瀬メグ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空の落書き

### 【Zマーク】

20973Y

### 【作者名】

綾瀬メグ

### 【あらすじ】

彼女の恋人は、彼女がこの世界で一番苦手なもの。結ばれるはずのない一人を繋ぐものは、あの日の約束と偽物の空。

” ゆるめに切ない恋物語 ” 目指して執筆中です。

特に新一の設定はパラレルですので了承ください。

## 1 (彼女の秘密)

『世界で一番嫌いな物は?』

その質問には迷わず答える。

「お化けとか幽霊です。」

そんな物存在しないのに、と笑い飛ばす人は必ず居ると思つ。それは怖いよね、と震いしながら同意する人も必ず居る。

だけど、私の本当の気持ちは誰にも理解出来ない。どうせ信じてくれないから、誰にも話した事もない。

この世界中で誰も知らない、私だけの秘密。

そら  
空の落書き

世の中には数え切れない程の怖い話や怪談が存在する。

学校の七不思議や禁じられた遊び。

この話を聞いたら しないと駄目だとか、何人に話さないと呪わ  
れるだとか。

それらは大抵、子供の頃は怖くて眠れなくなったりして、大人にな  
れば自然と忘れていくもの。

私が住んでいる街、米花町にも隠れた心霊スポットがある。

駅から数分歩いた2丁目、21番地。

住宅街に突如現れる古びた大きな洋館。

周りの景色とは全く似合わない、違和感だらけの異様な存在感のそ  
れは、何年も前から誰も住んで居ないせいで雑草が生い茂り、立派  
な門は錆び付いている。

子供達には有名過ぎる噂。

上から2段目・さらに左から4番目の窓…

満月の晩には、無人の筈のそこに人影が映り込む。

その姿を見た者は洋館に引きずり込まれ、一度と朝を迎える事は叶  
わない…

そんなくよくある怪談話。

「…それがこの”Hト－”の幽靈屋敷なんだつてよー。」

「元太君…これは”Hト－”じゃなくて”クドウ”って読むんですよ？」

「うひせーな！んなモン何でもい－じやんかよ！」

今日もランドセルを背負つた小さな子供達が、”心靈スポット”的前で怯えていた。

決して珍しい光景ではなくて、むしろ日常。

私はその度に思つ。

この『幽靈』が本当に誰かを拐つて返れないのだとしたら、むしろ大歓迎。

『彼』と一緒に居られるなら、この世界の何もかもを失つたつて後悔しないのに…とか、大作ラブロマンス映画さながらの台詞も心から言える、と。

子供達が去つた後、私は当たり前の様に『幽靈屋敷』へと足を踏み入れる。

その行動は決してホラー好きの好奇心なんかじゃない。  
むしろ私はその手の類が大の苦手で、知り合いが今の私を見たら驚愕すると思う。

それでも、これが私の毎日の日課。

この屋敷には実はきちんと持ち主が居て、それが世界的有名な推理小説家であることを知っている人はほとんど居ない。  
室内は定期的に掃除されて外見からは想像出来ないほど綺麗だし、  
電気や水道といったライフラインだつて途絶えていない。

無人であること以外は普通の住居なのだ。

広い廊下を抜け、アンティーク調の手擦りが施された階段を上った、  
2階の端から2番目。

子供達が噂する窓がある部屋。私は一直線にそこに向かった。

その部屋は壁一面が本棚になつた、『彼』お気に入りの場所。

読書好きの『彼』は、私が全く理解出来ない様な難しい書籍を四六時中読んでいる。

中でもお気に入りは推理小説だった。

机の上に開いたそれが置きっぱなしのところを見ると、今日も此処に居るはず。

「…あれ？」

…なのに誰も居ない。

「おかしいなあ…どう行つあやつたんだろ?」

しん、と静まり返つた室内で自分の声がやけに響く。

分厚い窓ガラスで外の音はほとんど聞こえない。

もうすぐ夕暮れ。

窓から差し込む陽の光が、斜めに長く影をつくる。

一人だけ異世界にぽつん、と取り残された気がした。

”居なくなるなんて有り得ない”と言い聞かせても、不安は消えない。

「まさか、ね。」

部屋の隅にある大きな鏡が目に入り、映る自分の姿を見て軽く一回転してみた。

去年までのセーラー服と違うブレザーの制服は、何だか少し大人になつた気がして。

「”新一に見せたかったのになー”」

「……うん。」

「可愛いって言ひて欲しかつた?」

「……うん。」

「ちょっとスカート短過ぎる感じやねーの?」

「…………は?」

振り返ると『彼』が私の足元で屈んでいる。

「ばつ…ばかっ…変態っ…！」

「見てんのよつ?…！」

私は反射的にスカートを押さえながら蹴りかかった。

けらけら笑いながら『彼』はそれをすりと交わすと、田の前の机に腰かける。

「オメーが此処に入るの見えたから、驚かしてやるつと思つてや。」

「もう…急に現れるの止めてよね。心臓に悪いじゃなー!」

「別に良いだろ?それはオレの特権なんだから。」

フワフワして掴み所の無い彼は、まるで小さな悪戯っ子だ。それでも彼の顔を見て安心しきつて自分に呆れる。

「ビーしたんだよ？んな浮かねー顔して。」

「…居なくなっちゃったかと思つた。」

「ずっと居たって。」約束”しただろ？「

”約束”…。

頭では理解していても、彼が破るはずないと分かっていても、私の不安は消えない。

こんなに不確かなものが他にあるだろ？

…そんな私の気持ちを他所に、彼は笑顔で続ける。

「で、入学式どうだつた？」

「今年も園子と同じクラスになつたよ。」

「そつか、良かつたな。」

”貴方も一緒にいたらもっと良かつたのに。”

浮かんだその言葉を押し込め、俯いた。

言つだけ虚しいのは自分が一番良く分かつてゐる。一緒に高校の制服を着て、同じ高校に通いたい…その願いは絶対に叶わない。

彼一人だけ残して私だけ歩き続けている罪悪感も、無理矢理考えない様にしてきた。

でも、きっと彼が高校生だったら…

「なあ、蘭。もしかしてコレ?」

顔を上げると、彼が笑顔で私の顔を覗き込んでゐる。

数秒前との異変。

それに思わず見とれて、顔が熱くなってしまった。

「…なによ、その格好。」

「オレの制服姿が見てみたいって顔に書いてあつたから。」

「そ、そんな事思つたわけないでしょ?…」

「あ、そ。でも結構似合つだろ?」

いつの間にか制服姿の彼は、帝丹高のパンフレットを片手にヒラヒラさせて微笑んだ。  
さつきまで思いつきり部屋着のラフな格好だつただけに、何だかどきどきする。

言葉にこよしなくても、彼は隠したつもりの私の心を読んでしまつ。  
私が分り易過ぎるんだ、と彼は言ひなご。

本当は入学式の最中、男子生徒を見て何度も思つた。  
彼ならきっと似合いそうだなつて。

それを読まれたのは悔しい。  
…けど、やっぱりカッコ良い。

こんな人が居たら、絶対女子生徒の注目の的だと思つ。  
想像してみたら嬉しいけど…  
ヤキモチばつかで疲れそつだな。

なんか複雑。

そんな妄想ばかりしていたら、彼と田が合つた。

「な、なによ?」

「いや。逢つた時はあんなにガキだつたのに、早えーなつて…」

「さうだね。もう一〇年くらい経つもんね。」

「… わすがに今までみたいには此処に来られなくなるんじゃねえの？」

彼が私の思考を見抜くのが得意なように、私にも特技があった。それは不器用なその言葉から、彼の真意を汲み取ること。強がりで、いつも笑つて、絶対に泣かない彼は本当の気持ちを人々言葉にしない。

だからいつだって、気づかない振りをして。

「今まで通り毎日来るよ? 新一が嫌だつて言つてもね。  
”約束” したじやない?」

私達が出会ったのは、小学校よりもっと小さな頃。

あの時からずっと親友で、幼馴染みで… 初恋の人である新一と、いくつかの”約束”を交わした。

幼い自分達にとつては、何より強い絆で。

大人になつた今でも、もちろん変わりはない。

でも私が中学生、高校生と成長していくにつれて、新一が迷い始めたのも知つてゐる。

そんな事、考えて欲しくないのに。

「まあ、蘭がやつらにいかけど。」

「うん。」

本当は不安だ。

いつか新一は、私から離れようとするかも知れない。  
黙つて私の前から消えてしまうかも知れない。

”約束”から私を解放する為に。

少しでも考えてしまつといつもなくて、彼を軽く睨んだ。

……さつと今の私は、駄々をこねる小さな子供みたいな表情をしている。

「蘭？」

「…………。」

黙つたまま両手を彼に向かつて伸ばすと、新一は呆れた顔で、でも少し嬉しそうに微笑んで。

私の腕を引き寄せて、優しく抱きしめてくれる。

男の子の癖に華奢な体。

肌や髪、唇の感触は間違いなく感じるのは。

たつたひとつだけ、たりない。

出逢つた時からずっと。

彼の左胸からは、何の音も聞こえない。

私が恋した、この世界で一番大好きなひと。

それは私が”この世界で一番嫌いなもの”だった。

## 2 (彼の特技)

「なんでもいいよ。わたしがかなえてあげるから。」

子供だったから。

魔法だつて使えると信じていたから、無邪気に言葉にした。

彼の一番の願いは叶えてあげられないのに。

残酷だった。

でも、その時彼が口にした願いはとても些細なもので。少し悲しそうな笑顔で呟いた。

「…そら、そら、をみてみたい。」

「そら？そらなら、どこからでもみえるよ？」

もう少し後になつて、知つた。

彼が見ていられる空は、窓枠に仕切られた四角い空だつたこと。私達が当たり前に見ている果てのない空を、彼は知らなかつた。

## 2（彼の特技）

「あれ？ 何かあつたのかなあ？」

放課後、私は新一の元へと向かつて いた。

彼の家が近づくにつれ、いつもと様子が違うことに気がつき、立ち止まる。

何だか辺りが騒がしい。

数台のパトカー や、刑事らしき人物。取材しているアナウンサーとカメラまで居る。

その周りを囲むように、大勢の見物人が騒然としていた。

一瞬『幽霊屋敷』の方かと不安が過る。

背伸びしながら覗き込むと、どうやら彼等が出入りしているのは隣の家だ。

(事件、かな? こんな身近で起るなんて…)

…でもそれよりも、私が考えなくちゃいけないのは別の事。早く新一に会いたくて走ってきたのに、これだけ人が多いと彼の家へ入れない。

無人のはずの『幽霊屋敷』に女子高生が出入りしているなんて、不審がられて変な噂でも立てられたら後々面倒になる。

(仕方ないな。)

表門から大きく迂回すると、人影の無い細い路地。

騒然としている向こう側が嘘みたいに静まり返っている。

(…誰も見てないし、いいよね。)

裏側まで立派なこの屋敷の柵は、一部だけ老朽化している箇所があった。

子供の頃、よくそこから潜り抜けて中へ入って事を思い出したのだ。

…さすがに今は上から乗り越えるしかないんだけど。

こんな事してると不法侵入してるみたい、と自分でも思つてしまつ。

「あなた、何してるの?」

「…へ？」

最悪なタイミング。

今まさに柵に両腕をかけた瞬間、背後からスーツ姿の女性が声をかけてきた。

次々と隣家の裏口から刑事らしき人が数人出て来るのが見える。その全員が不思議そうに私を見上げていた。

「その家、ちゃんとした持ち主が居るんだから勝手に入っちゃ駄目よ。」

「え?…や、あの…」

速攻で柵から離れ、思わず一步後ずさる。

現役刑事達に囮まれた私は、追い詰められた犯人みたいだった。有り得ない状況が情けなくて溜め息が出る。

「まつたく…高校生にもなつて幽霊屋敷の探検でもするつもりだったの?」

「ち、違います!えつと…じ、事件に興味があつて…」  
「…」  
窓から見えるかなーって…」

「探偵?」  
「…」

「ま、まあそんな感じです。…」「めんなさい。」

痛い所を指摘され、咄嗟に出た口実は完全に嘘っぽい。

自分に呆れた。

「な、何があったんですか？」

「…ちよつとね。」

違つ話を振つて会話を逸らしてみる。

（本当は大して興味も無いけど…）

もちろん野次馬もどきみたいな一般市民に詳細を教えてくれる筈はないのは分かつていた。

だけど、このままじや余計な疑いまでかけられそうな気がして。

頭を悩ませていると、彼等の背後から低めの声が聞こえた。

「佐藤君? 何かあったのかね?」

ふいに声の主と田が会つ。

田深に被つた帽子が印象的な男性刑事。

おしゃりく雰囲気からして、周りの刑事の上司だらう。

(あれ?)の刑事さん何処かで…。)

会つた事がある。

そんな不思議な感覚がしてじつと見つめていると、彼も驚いた様に田を見開いた。

「もしかして君…毛利君の娘さんじゃないか?」

「え?」

再び彼の声を聞いて、記憶が晴れた。

私が小学生になるまで刑事だった父親の職場で、よく私を可愛がってくれた父の上司。

あれから何年も経っているけど、この声と姿は彼に間違いない。

まさか、こんな風に再会するなんて…

「め、田暮さんですか?」

「やつぱり蘭君かー大きくなつたなあ。」

「田暮警部、この子と知り合になんですか？」

「ああ。今は退職した部下の娘さんですね。」

予期せず私が彼と知人同士だった事で、その場の空気がどこか和んだ。

今は探偵業の父親の話から、昔の思い出話を。

数分間、それまでの緊張感が嘘のように解れていた…のだった。

会話は何故か、とんでもない方向に向かってしまった。

「お父さんが元刑事で、今は探偵なんて。なら、事件に興味があるのも理解出来るわね。」

「ほ、本当にすみません。」

「でも高校生が知るには残酷過ぎるわよ。」

「…え。ここの方、もしかして亡くなったんですか？」

「知ってる人？」

「は、はい。小さい頃からよくこの辺りで遊んでましたから。」

その言葉に、女性刑事が田配せした。

「…田暮警部。」

「そうだな…一応彼女に話を聞いてみるのもいいかも知れんな。彼、ほとんど近所付き合いのない人だつたみたいでね。情報が少ないんだよ。」

「…はあ。」

「一見自殺で亡くなつてゐるんだが…不可解な点が多いんだ。」

小さな頃から知つてゐる人が、もつこの世に居ない。

考えただけで血の氣が引いて貧血でも起こしそうだった。

元々作り話のオカルト系すら苦手な私に、現実に起きた事件の話なんて。

…到底耐えられそうにない。

そんな気持ちは氣づいて貰えず、事件の全容…現場の状況の細部まで容赦なく聞かされる。

一応知つてゐる限りの情報は彼等に伝えたものの、もちろん私なんかに何か分かる訳もなく。

「蘭君、悪かったね。彼について、他に何か思い出したら連絡してくれ。」

「は、はい。」

ぐるぐる田が回って倒れそうになる寸前。

田畠警部に連絡先を渡されて、ようやく開放された…

「…ただいま。」

「よお蘭。おかえり。」

リビングへ入ると、さつきまでの緊張感とは真逆な緩い声。  
大きなソファーで「口口口」読書している新一を見たら気が抜けてしまつた。

私も力なく、彼に向かいのソファーに倒れこむ。

「新一、また本読んでるの？」

「ホームズは何回読んでも飽きねえよ。」

「よくそんな血生臭いミステリーばっか読んでられるわね…」

「何だよ、やけに機嫌悪いな。何があったのか？」

「…あのね…」

つこさつき田暮警部達から聞いた話を、新一に聞かせてみた。  
自分の中だけに留めておくのが辛くて、こうじつ事に免疫のありそうな彼なら大丈夫だと思つて。

でも、話始めてから後悔した。

いくらミスティリー好きだからって、本物の…しかも自分の家の隣で  
人が亡くなつたなんて知つたら、彼も苦しくなるかもしれないのに、  
と。

…そんな私の心配は全く無用だったと気づかされたのは、数分後。

話が進むにつれ新一は、塞ぎこむどひこひか…もの凄く楽しそうな表情をしていた。

「それで、肝心の不可解な謎つてどひこなんだ?」

「新一…何か反応おかしくない?人ひとり亡くなつてるんだよ?…」

「おかしいって何が?」

「その表情よ。やけに嬉しそうじやない。」

今の彼は、寝る前に本を読んでもらう子供みたいに嬉しそうで。かなり興味津々で、目がキラキラ輝いてる。

「だつてすげー楽しいもん。」

「…ちょっと可愛い。」

とすら思つてしまつた私も相当おかしいかも知れない…

一通り話終えると、彼はすぐに呟いた。

「それって自殺じゃねえよ。」

「へ？」

「すぐにその刑事に電話した方がいいと思うぜ？犯人に証拠消される前にな。」

「は、犯人つて…」

「他殺つてこと。まあ、可能性だけどな。」

普通の人なら考えない視点。

新一はそれを持っていて、彼の推理を聞けば聞くほど納得がいく。見ていないはずの現場の光景が、鮮明に浮かんでくるみたいに。

次第に私も彼等に話さないと、という危機感を感じてきた。

でも、警察関係者でもない私達の話なんて当てになるのだろうか。その不安も過ぎつたけど、彼は「大丈夫」と笑う。

もしこれが新一の推理通りなのだとしたら、犯人は必ず捕まえなくちゃいけない。

そう自分に言い聞かせ、携帯を手にした。

でも、知り合いとはいえ相手は現役の刑事。ただの高校生の推理なんて聞く耳を持つてくれるか疑問だし、もし間違っていたら凄く迷惑をかけてしまつし、少し怖い。中々電話出来ずに緊張していると、新一は私の隣に座つて笑つた。

「心配すんなつて。ひとつ可能性として、その刑事に伝えてみろよ。」

「……うん。わかってる。」

「本当は現場を直に見られたら確信出来るんだけどさ。オレは家から出られねえし、蘭も見たくないだろ?まあ、後は警察に任せればいいんだから。」

私は頷き、決意して電話をかけた。

隣で話す新一の推理を、私の言葉で田畠警部に伝える。

最初は試しに聞いてやるか、という雰囲気だった彼も、的を得ていろいろ々の推理に興味を持ち始め、最後は「すぐに再捜査する」と約束して、通話を終えた。

「…」それで良かつたんだよね？」

「いいんだよ。結構楽しかったし。」

「や、そういう意味じゃなくて…まあいいけどね。」

「え？」

「でも新一、凄いよ。ただの推理オタクじゃなかつたのね？」

「…それ褒めてんのかよ？まあ、これくらいなら蘭でも解けるんじやねーの？」

「…無理に決まつてるでしょ…」~~ばか~~。

「」の数日後。

本当に犯人が捕まり、しかも新一の推理は寸分狂わず的中。私は断つたのにも関わらず、警察から捜査協力の感謝状なんでものを渡されてしまった。

…しかも。

「な、なによこれー?！」

「うわー、すげえなー。」

ある日の新聞に、信じられない記事が載っていた。

「女子高生、見事難解事件の真相を見抜く！推理力は現役探偵の父親譲り。だつて。」

「嘘でしょ…私何もしてないのに…!…どうして…!…」

「いいじゃねーか。素直に喜べば。」

「あのねえ…解いたのは新一でしょ?！」

「どつちでもいいだろ、そんなの。」

頭を抱える私を見て、新一は心底楽しそうだった。

こんなに楽しそうな彼を見るのは、テレビでサッカーのワールドカップを観戦していた時以来…かもしれない。

「これから蘭宛に依頼が来ればいいのに…」

「絶対嫌。ていうか無理！」

「その時はオレが推理してやるからさ

「勝手なこと言わないでよー。」

「あー本当に来ねえかなー、依頼。」

完全な不本意で女子高生探偵が誕生した瞬間だった…

「…ねえ、らん。さつきから、だれとはなしてるので？」

親友の言葉を聞いた時、何となく予想していた事が確信に変わった。

でも私は、新一を怖いだなんて微塵も思わなかつた。  
目の前に居るはずの彼を、私以外は認識出来ないなら。  
彼は私にとつて特別な存在なんだつて。

ああ、やつぱりそうだつたんだ。それなら、私は。

ずっと彼の傍に居よう。

一人になんかさせない。

そう決意して、他の誰にも気づかれない様に彼に笑つてみせた。

あの時…きっと本当は泣き出したかった彼の、不器用な笑顔が忘れられない。

『蘭君、授業中なのにすまないね。ちょっと事件の事で相談なんだ  
が…』

「大丈夫です。」

数学の授業中に鳴り出した着信。

咄嗟に理由をつけて教室を抜け出した私は、今屋上に居る。

あの事件をきっかけに、こうして日暮警部から事件について”相談”を受ける日々が始まった。

無視する訳にも放置する訳にもいかず、その度仕方なく新一に相談しながら解決していく。

こんなこと正直に「無理です」と辞めてしまえばいいのに、推理している時の新一の嬉しそうな笑顔を思い出したら、今回も彼に話してしまう自分がいる。

(本当ダメだなあ…私って。)

フェンスに寄りかかって、青い空を見上げる。

晴れ渡つた空には雲ひとつ浮かんでいなかつた。

空そら、か…

「…………。」

『蘭君らんぐん』

「あ、すみません。少しだけ、考える時間を貰つてもいいですか？」

『ああ、もちろんだよ。』

「それと、現場の写真を送つていただけると助かります。いつも通りパソコンの方に。」

『わかつた。宜しく頼むよ。』

通話を終えると、走つて教室へと戻る。

ドアを開いて担任と田が合つて、怒られるどころか…

「事件なのね？遠慮せず行つてきなさい！貴女は我が校誇る高校生探偵なんだから…」

「へ？」

「蘭、頑張つてねー後でノートのペーパーあげるから安心してー。」

「園子。あ、ありがと。」

こんな事で本当にいいんだる?つか?

そんな疑問はさておき、急いで机から鞄を持ち出す。クラス中の歓声に胸中を押され、私は教室を後にした…

「あ、新一？また田暮警部から頼まれたんだけ?…今からそっち向かうね。」

『分かった 今回はどうな事件なんだ?』

(相変わらず嬉しそうだな…)

靴を履き替えながら、携帯で事件の内容を新一に教える。現場写真は工藤家のパソコンに送つて貰つよつにしてるので、内容さえ伝えてしまえば、後は彼が勝手に解決してしまつのだ。

私は彼の推理を横で聞きながら、田暮警部に話すだけ。

(事件現場の写真なんて絶対見たくないもん…)

見てしまったらたぶん、貧血どころじや済まない自信がある。数日間は確実に寝込んで悪夢を見続けそうだ…

(新一って何で平氣なんだろ?男の子ってそんなもん?)

そんな事を考えながら校門に近づいた時、見慣れない制服を着た一人の男の子が目に入る。

色黒の肌に黒髪。見た事のない顔。

「あんたか?毛利蘭つて。」

「…く?」

予想外に声をかけられ…いや、むしろ名前を呼ばれて思わず立ち止まってしまった。

「あの…『』かでお会いした事ありましたっけ?」

「やつぱり『』か…ふーん、何や普通の女子高生やな。」

(か、関西弁?てか誰?)

間違いなく初対面のはず。

なのに全く遠慮する事無くジロジロ見てくる彼に少し不信感を覚えた。

思わず一歩後ずさった私を見て、彼は一いつ瞬と笑う。

「あんた最近、東京で有名な女子高生探偵やろ。どんな奴か一目見  
たろ思つてな。」

「は？…何それ？！」

「でも全然探偵には見えんわ…」

…それってまさか関西にまで噂が拡大してること?  
事件解決してるのは、本当は新一なのに?  
そんな大事になつてているなんて完全に予想外だつた。

頭、痛い…

「あ、まだゆうてへんかつたな。オレは服部平次。あんたと同じ高  
校生探偵や！」

「高校生探偵？」

「ああ。あんた、この時間に学校出てくるつちゅう事は…事件か?  
そんなり…」

(い、嫌な予感がする…)

“ひつする～”の感じ、きつといのままじや何か面倒な事になる気が

する。

もし「一緒に現場に行く」とか言われてしまつたら?  
もちろん事件現場を直視しなきやいけないのも嫌だけど、目の前に  
居る本物の「探偵」をやり過ごすのは、並大抵なことじやない。  
「誰かに相談してゐる」と見抜かれたところで、新一の事は説明しよ  
うがないし。

彼の視線には隙が無い。

現にこの数分のやりとりだけで、私の事を疑つてゐるのがよく分か  
る。

『蘭? 何かあつたのか?』

(……あー)

手にした携帯を見て思い出した。

急に話かけられたせいで忘れていたけど、新一との通話はまだ切れ  
ていなかつたのだ。

…… いけるかもしね。

「うーごめん新一ーすぐ行くからーまた後で電話するねー!」

「?シンイチ? ?

「あの、別に事件とかじやないの。聞いての通り、ちょっと知り合  
いが急用で早退するだけで…」

ほー。知り合い、か。

通話時間が表示された携帯画面を見せ、本当に電話してた、ヒアピールしてみた。

でも。」の田はめちやくちや疑つてゐ

一步ずつ詰め寄られて、ついに背中に校門の柵が当たった。もう逃げ場が無い。

「なあ。今までの事件、ほんまにあんたが…」

「「え？」

突然聞こえた大声に、私と彼は同時に振り向いた。  
数十メートル先からセーラー服の女の子が走つて来るのが見える。

「げ！和葉！！」

( 今度は誰よ… )

息を切らして辿り着いた彼女は、呼吸を整える事も無く彼を睨みつけた。

「 平次！ あんた何処行つてたん？ ！ めつりや 探したやん… ！」

「 い、いや一道迷つて… 」

「 嘘… 東京見物 やけに 楽しみにしてる思つたら… 」 」の子に会つて  
来たんやろ… ！

いつの間に東京で女作つてんの… ！」

「 はあ？ 」

「 最低… 平次のアホ… ！」

あまりの勢いに、私は為す術なく見物しているしかなかつた。  
さつきまでの緊張感は何処へやら、彼は思いつきり彼女に圧倒され  
ている。

彼女は今度は私を睨みつけた。

「 ふーん… 結構可愛いやないの。 ふーん… 」

明らかに敵対心剥き出しの視線。

彼から開放されたと思ったら、今度は彼女に捕まってしまった。  
怒りの矛先が私に向いたのをいいことに、彼は少しづつ彼女の背後へ移動している。

「そや… オレ、 嘘のとこあんねん。… 集合時間には戻るわー。」

「え?…」

(…に、逃げた…。)

言いながら、すでに全力疾走していた彼の姿はすぐに見えなくなる。  
結局訳が分からぬまま見知らぬ女の子と2人取り残されてしまった。

何となく氣まずい空気が流れる…

「… で?… いつから平次と付きあいつてんのん?」

「え?…いや、何か勘違いしてません?」

「何を?…あんた、平次の女なんやん?」

「ち、違います。彼とは今初めて会つたばかりで…」

「…とぼけたかてあかんで。」

一通り説明しても、彼女の疑いは晴れない。  
女の子って疑い深いからな…  
どうしたら信じてくれるだろ？

その方法は齒むまでもなく、ひとつしかない。

「あのね…わたし、好きな人居るから。服部くんとは何もないよ？」

「…好きな人？」

「うん。これからその人に会いに行くところだつたの。」

「… そ、うなん？」

咳くと彼女は、あじけない微笑みを浮かべた。  
さつきまでの表情が嘘みたいに、笑うと可愛い。

どうやら修学旅行で東京見物に来ている大阪の学生さんで、今は自由時間。

さつきの彼は「西の高校生探偵」と呼ばれるくらいの有名人で、彼女は彼の幼馴染…という事だ。

(なんとか疑いは晴れたみたいだけど…)

それにして。

「平次は何処行つたんやろ?」

(…何かまた嫌な予感がする…)

#### 4 (物語)

「なあ、その入って蘭ちゃんの彼氏?」

「か、彼氏?……うーん、そつか。彼氏……になるのかな。」

「ええなあー羨ましいわ。」

「和葉ちやんじやん、服部君と付き合つてゐるんじゃないの?」

「うやうや。平次にとつてアタシはただの幼馴染や……」

そう言って俯き、寂しそうに笑う彼女。  
でも私は、そんな彼女こそ羨ましい。

だつて想いが通じたえすれば、彼に見せたいものを見せてあげられる。

夜空いっぽいの流れ星。  
水平線が朱あかく染まる海。  
青く輝く一面の雪。

そんなに多くは望まないから。

せめて死ぬまで、彼と同じ景色を見ていたいのに。

#### 4 (きみの瞳)

「結構遅くなっちゃったなあ……」

和葉ちゃんと別れた後、とぼとぼ一人で考え事をしながら歩いていた。

高校生探偵であるという「服部平次」。

彼の鋭い視線を思い出すと、何もかも見抜かれているようだ……

仮に誰かに本当は私の推理ではない事が分かつて、新一の事を突き止められたとしたって、彼の存在が世間に広まる事はないけど。それでも極力、面倒になりそうな事態は避けておきたかった。

新一が「自分は蘭以外に認識されない」という彼自身の存在をどう思っているかは分からない。

だけど、出来るだけそつとしておいてあげたい。

傷つく様な嫌な出来事があつたって、彼はきっと顔に出さないから。もつと頼ってくれたらいいのに。

彼の性格は分かつていても、やっぱり寂しい。

いつも私が甘えてばかりで、彼が私に頼つたり甘えたりすることは少なかつた。

そんな記憶はほとんど無いに等しい。

（私じゃ頼りないのかな…）

考える程、氣分は沈む。

空はこんなに晴れ渡つていて、私は下を向いて歩いていく。

いつもの立派な扉が余計に重く感じた。

「新一、遅くなつてごめんね。」

「あ、蘭おかえり。」

リビングに着いた私は、そこに居た人物の姿を見て持つていた鞄を思わず落とした。

「…………え。」

「よー姉ちゃん。邪魔してんでー！」

全く意味が分からぬ。

「ぐく自然にソファーに腰掛け、笑顔で右手を軽く上げたのは間違いない彼。

「服部平次」。

（どうして彼が此処に？！てか、新一のこと跟えてる？！）

親友の園子や新一の両親でさえ彼の姿は見えなかつたのに？  
今日突然現れた彼には見えている？？

「しつかし今回の事件は単純過ぎてつまらんかつたわ。そや！」な  
いだオレが遭遇した事件、めっちゃおもろくな…」

「へー。そりや確かに面白そうだな。そつこやオレもこの前…」

「おー何やワクワクしてきよつたでー！やつぱオレとお前はびつか  
似てんのやなー」

（しかもすでに仲良わんこしてんじー）

私は開いた口が塞がらず、しばらく突つ立つたままだつた。  
それに気づいた新一と田代が合つて、やつと我に返る。

思わず彼の腕を引つ張つて廊下へ連れ出した。

「し、新一！何で彼が此処に居るの？」

「ああ… セツモ、玄関の呼び鈴を連続で鳴らしまくられて。あまりにうるせーから思わずドア開けたら、何故か普通に話しかけてきたんだよ、あいつ。」

「それでいつの間にか意氣投合しちゃったの？… てか変な事聞かれなかつた？」

「や、特には。雰囲気からしてオレの事は何も気がついてないと思つけど…」

「…どうしたの？」

「何かあいつ、初めて会つた気がしねーんだよな。初対面のはずなのに。」

…過去に何処かで彼と会つた事があるつていつこと？

今まで新一から彼の話を聞いた覚えは一度も無い。

彼が新一を認識出来るのには、他の人とは違つ何かがあるんだろうか。

二人して今の状況を理解出来ずに居ると、困惑の元凶である張本人が顔を出した。

「なあ。その田畠つちやつ刑事に早いとこ電話した方がええんぢやうか？」

「へ？！」

「隠さんでもええ。姉ちゃんがほんまの探偵じゃないんは最初見た時から分かつてもうつたわ。」

「そ、そつ…だよね。やっぱ…」

若干失礼な事を言われてる氣もするけど仕方ない。間違いなく事実で、いつ誰かに知られてしまつてもおかしくない状況だったのだ。

それよりも氣がかりなのは、

「あの、新一が代わりに推理してるって事は…誰にも、言わないでくれる？」

「心配すんなや。オレは別にそこには興味無いねん。あんたらにはあんたらの事情があるんやろ？」

「じゃあオメー此処に何しに来たんだよ？」

「オレと同じ『本物の』探偵をこの田で見ておきたかったんや。それに此処は昔…」

言いかけて、彼は言葉を濁した。

。

一瞬の沈黙の後、携帯の着信音が鳴り響く。

着信相手を確認した彼は、明らかに不機嫌そうな顔をした。

「…また和葉や。何やねんアイツ。しつこいやつちやなあ。」

「そついえば修学旅行中なんじやなかつたの? 時間大丈夫?」

「時間? そんならまだ余裕が…」

「あ。そつこや時計動いてねえよ。」

「…なんやと?」

「だから、あの時計動いてねえんだって。」

「……。」

「…服部くん…電話、出た方がいいんじゃない?」

「あ、ああ…そつみたいやな…」

案の定、通話ボタンを押した直後から響き渡る和葉ちゃんの怒鳴り声。

すでに集合時間を過ぎていたらしい彼は、携帯を30センチ以上耳

「元から離した状態で、面倒臭そつた顔をしながら怒られ続けている。

『ええ加減にせえやー…ビアホー………』

その言葉を最後に乱暴に切られる通話。

私と新一は黙つて見守るしかなかつた…。

「気をつけてね。駅までの道、分かる?」

「大丈夫や。東京初めてやないからな。」

「あ、ねえそりゃええば…どうして新一の家を知つてたの?」

「え?…あ、ああ…来る前に姉ちゃんの事、少し調べてな。まー細かいこと気にすんなや。」

(細かい事つて言われてもなあ…)

「ほな、また来るわ!」

今日一日ですっかり馴染んでしまった彼は、笑顔で玄関を出て行く。  
新一はさつと考え方をしているみたいだつた。

彼の姿が見えなくなつた後も、しばらく黙つたまま。

「新一へどうかしたの？」

「……いや。何でもねえ。」

田畠警部への連絡を済ませた頃には、陽が傾いていた。  
新一は、ぼーっと窓の外を眺めている。

（いつもなら推理した後、凄く楽しそうなのに…服部くんの事、気になつてゐるのかな?）

私は新一の隣に座つて、彼と同じ景色を見てみた。

大きな窓。

でも、ここから見える空は……

「蘭…あのさ。」

「…ん？」

「前に何かの本で読んだ事あるんだけど。人間の瞳って、すげーよく出来るんだって。」

黙つて彼の声に耳を傾ける。

新一の肩に頭を乗せ、沈んでいく夕日を眺めた。

「絵とか写真とか、綺麗な景色ってよく見るけど……どうしても実際に見る景色には劣るんだって。

やっぱ、切り取られたものって勝てねーんだ。

人間の瞳は、右左もどっちを見渡しても、視野いっぱいに広がる景色を一番綺麗に認識するって。」

「……。」

「……ここから見える景色は、いつも切り取られた作り物みてーって思つ……何か笑えるよな。

オレはこの景色以外知らないくて……今見てる空だってこんなに綺麗、なはずなのに。」

新一はいつも通り笑ってる。その表情に曇りは無いの。」

言葉は、悲し過ぎる。

だから彼を抱きしめた。

こうして傍に居たら、全て私が代わるらしいのに。

「…新一。泣いたつていいよ?見えないし。」

「…泣かねーよ。」

本当は、泣きたいのは私の方。

彼もそれを知つていて、でも心地良さそうに私の腕の中で目を閉じた。

私は新一に無限の空を見せてあげられない。  
だけどずっと一緒に居るから。

新一の瞳に映る景色がいつも綺麗で在る様に、笑つていられるよう

に。

…傍に居る、から。

「…本当は知つてゐる気がする。オレがこうなる前に見た、どつかの空…。」

「...え?」

「あいつ... 服部の事も。」

## 5 ( あこの「好き」 )

「…なに?」

キスの途中に聞こえた、少し不機嫌そうな彼の声。

私が彼の口元に指を当て、それを止めたから。

「…分かっているのに。」  
今日もまた言葉にする。

「…好き?」

「…んなの言わなきや分かんねえの?」

この質問には、いつも明確な答えは返つてこない。  
すぐに指は解かれて、曖昧にされてしまう。

”好き”の一文字。  
女の子が一番欲しがる言葉。

彼から聞いたことは一度も無かつた。

5 (あいのことば)

(あーあ… 昨日も聞けなかつた。 )

本来学生なら集中すべき授業中、私は全く関係ない事を考えていた。

数日前に偶然出会つた大阪の女子高生。  
彼女の質問に答えてから、今まで考へない様にしていた不安が過り  
始めていたのだ。

私の好きな人。

その人は彼氏?と聞かれて、一応肯定したけど…

(彼氏… なんだよね? や、でも… )

一般的には恋人になるのつて、想いを伝えてそつなる訳で…

どっかが伝えたら、もう一人が返事して。

両想いつて確認したら晴れて恋人。とかそんな感じだと思つ。

記憶を辿ると彼から聞いた覚えの無いその一文字。

私はもちろん伝えてる。

だって本当に彼が大好きで仕方ないから。

でも、いつも彼の返事って…聞けてないような。

(…あれ? もう少しこな時間だったんだ…)

終業のチャイムが鳴り響き、一気に現実に引き戻される。

心のモヤモヤが晴れないまま、溜め息をつきながら教科書を閉じた。

「蘭つてさ。本当は彼氏居るでしょ?」

隣の席から突然放たれた言葉。

「え? ! ? !

あまりに急で、多少声が裏返つてしまつ。

彼女はそれを見逃さなかつた。

「あーやつぱり！？ だつて最近ずっと切なそつに溜め息つこひやつてた… やつぱ恋の悩みだつたのね？！」

「ち、違つよ園子…」

「ねえ～どこの誰なわけ？！ 教えてよ… 親友でしょ？！」

「だから嘘なこつてば…」

…私の言葉は彼女の耳を素通りしてこるらじー。

小さい頃から親友である園子こは、一度だけ新一について話したことがある。

話した… と云つても核心に触れた訳じゃなくて「新しい友達が出来たから紹介する」と彼の家に連れて行つたのだ。

あの時の事は今でもよく覚えてる。

”…ねえ、らる。さつきから、だれとはなしてるの？”

始めは冗談かと思つたけど、彼女の顔を見て悟つた。  
園子には本当に新一の姿も見えてないし、声も聞こえていない。

だからそれ以上、何も話せなかつた。

一番の親友である彼女に隠し事をするのは辛かつたけど、心配かけたくなくて。

「せめてが、告白の言葉だけでも教えてよ。今、ちょっとといいかな  
~つて人がいるんだけど、『』はストレートに好きです！がいいと  
思つ？」

「『』告白？」

「そうだ…やっぱり普通、恋人同士には『告白』が存在する。  
片思いからの発展。勇気出して呼び出したり、電話やメールで伝え  
たり…  
でも……

「…言われたことないな。そんなこと。」

「…え？好き！とか愛してるとか、何かしらあつたでしょ？さす  
がに。」

「ないよ。変…なのかな？」

「ちょっと？！それ、遊ばれてんじゃないの？！」

大声で机を豪快に叩いた園子に、クラス中の視線が集まつた。  
会話が会話なだけに、心なしか白い目で見られてる気がする。

園子は軽く咳払いすると、私に耳打ちした。

「蘭、まさか…その男によからぬ事まで許してんんじゃないでしょうね？」

「な、ななな…なにそれ？」

「決まつてしょー。わざわざわざわざのなにか？」

「う…」

「…まさか図星？」

「や…でも、言葉で言われなくとも好きでいてくれてる感じはあるけど…  
それにやつぱり私が好きだから、何て言つたか…」

「つまり流れちゃつてしょー」と…

「…うん。ダメ…かなあ。」

「ダメダメー！絶対駄目よそんなの…男なんて表面だけじゃ分からぬいのよ…！」

「そ、そつかなあ…」

「わ…本当に大丈夫なわけ？那人…」

大丈夫？と聞かれても答えようがなかった。

（「」の前の服部くんはとりあえず別として。）

新一は私以外には認識出来ない。

つまり他の女人の人と関わりようが無いんだし、さすがに遊ばれてるなんて事は…

つて…でも待つて。

もし、その逆だったら？

私しか居ないんだから、仕方なく…とか…。  
だから言わないんだとしたら合点がいく。

でも、それは最悪の結末。

もし本当にやつて、問い合わせることで彼が認めたらどうするの？

「…どうしよう。やっぱり聞いた方がいいのかな？」

「いいに決まってるでしょ？はっきり聞いてきな！“私の事どう思つてるの”ってね。」

「…う、うん。でも…」

この場で決意しても、新一の顔を見たらきっと気持ちは搖いでしまう気がした。

私は彼の事が好き過ぎて、いつもどこか少し緊張してて。  
もう出逢って10年以上経つのに…気持ちは冷めるどころか、時が  
経つほど大きくなる。

彼が田の前に立つと胸が苦しくなるし、触れた指は震える。

一緒に学校に通つたり休日ごどこかへ出掛けたり…『普通のこと』は出来ないけど、傍に居られたら充分だつた。

新一が隣に居て、くだらない事を話して笑つて…それ以外何も望まないくらつて、彼が好きで。

もつ『好き』なんて簡単な言葉じや表現し切れないのかもしれない。  
彼に本当の気持ちを聞くのは怖い。  
けど、もし新一が”すき”って言つてくれたら…

私はきっともう、新一から離れられない。

今でもそうだけど、今以上に。

「でも、何？」

「…聞けるか不安なの。」

「じょうがないわね。じゃあこの園子様が直々に…」

「や、聞いてくるー私、頑張るからー。」

「何よ、そんなに会わせたくない人なの？」

「…そのうち、ちゃんと話すから。『めんね…でも、ありがと。園子。』」

そんな会話の後、今私は新一の家の前に立っていた。  
一度気になり出すと全てが上の空で、部活は休んでしまった。

今日は何だか、この洋館に圧迫されている錯覚さえする。  
それくらいに緊張するけど、扉を開けばもうやるしかない。

「あれ、蘭？ 今日早いんだな。 部活は？」

「あ…… 今日は休みだったの！」

彼はいつもの部屋で読書していた。

立派な机の上には分厚い本。

頬杖をつきながら笑顔を見せた彼は、いつもと何も変わらない。

違つるのは私自身だ。

変に意識しているせいで声が上ずつてしまいそうだった。

時間が経つたらまた迷ってしまう……だから、今すぐ。

聞くしかない。

「し、新一……」

「な、なんだよ?」

詰め寄る私に圧倒された彼は、座っていた椅子から落りそうになつた。

「あの……どうしてでも聞きたい事があるんだけど……」

「……聞きたい、こと?」

言いながら体温が上がつてこゝのが自分で分かる。

目を逸らしたくなるけど、真つ直ぐ見つめて聞かない意味が無い。

「し、新一って……その、……。」

「え? 何?」

「だ、だから……えつと……」

「蘭? 聞こえねえよ……」

「わ、私って、新一にとって”彼女”なの？」

精一杯振り絞つた言葉は、本来発するはずだったものと少し違つた。  
彼は完全に『?』を浮かべた困惑の表情。  
でもすぐに笑顔になつた。

「んな事気にしてたのかよ？何言つかと思つたら……」

「…」めん。」

「あー、でも確かにあんまり考えた事なかつたな……そつこうの。」

「ナハハ、だよね？」

…やつぱり。

今のは答えになつてない。

もしかして、意図的に話逸らしてない…？

考えていた最悪の事態がまた頭を過つて、途端に弱気になつてしま  
う。

”…こんな思いして今まで、聞かなくちゃいけないもの？”

今ままでも充分幸せなのに。  
でも、私も…ちゃんと知りたい。

「新一は…」

彼の瞳が微妙に揺らいだ。きっと彼は私の言葉を予測している。  
照れて言えない、とかならないよ。無理に聞かないから。  
だけど彼の場合はどこか違う。  
本当に言いたくなさそうに感じる。

「私のこと、本当に好き…？」

呟いた声は、諦めかけたように震えていた。

「私のこと、本当に好き…？」

今にも泣き出しそうに震えた声。

蘭の気持ちを知っていて、それでも絶対に言わなかつた。

別に照れ隠しじゃない。オレ自身が言葉にしないと決めていた。

嫌いだなんて嘘でも言えないから。

問われる度に曖昧にして、誤魔化し続けてきた。

たつた一つの方法だと信じて。

いつから此処に居たのかは分からぬ。

目を開くと、一番最初に高い天井が見えた。

それまで何をしていたのかは全く覚えていなくて、思い出せるのは自分の名前と、此処が今まで住んできた家だという事だけ。

起き上がりて辺りを見回しても、誰も居ない。  
広い廊下は静まり返っている。

仕方なくリビングのソファーに座つて、窓の外を眺めた。

天気は大雨。

おそれらく昼間なのに薄暗い空は、時折雷が鳴り響いている。  
眺めながら、何となく自分の身体に違和感を感じていた。  
起きたばかりなのに睡眠をとった感覚が全く無くて。どこか、何か  
が物足りない。

それが何なのかは理解出来なかつたけど。

「急に降つて来ちゃったわね。雨宿りしていつて?後でお母さんの  
所に送つてあげるから。」

「…うん。」

突然、玄関の方から話し声が聞こえた。  
大人の女性と、小さな子供の声。

(… かあさん、かな。)

ソファーから降りて玄関へ向かうと、濡れた傘をたたんでいる母親の姿が見えた。

その傍らに、見た事のない同じ歳くらいの女の子。彼女の方は全身ずぶ濡れだった。

「すぐに拭くもの持つてくるからね。」

「ねえ、かあさん… その子、だれ?」

「此処でちょっと待つてねー。」

確かに問い合わせたはずなのに、見向きもせずに素通りされてしまった。

廊下の奥へと消えた背中は、結局一度も振り返らない。

(聞こえなかつたのかな?)

氣にも留めず、黙つたまま突つ立っている女の子に視線を移した。今にも泣き出しそうな彼女は、寒さのせいか小さく震えている。

「傘、持つてなかつたのか?」

「こきなりふつてきたから……」

「蘭ちゃん！お待たせーー！」

タオルを持って走り寄つて来た母さんは、彼女の頭からそれを被せ、くしゃくしゃと拭いてやつた。

まるで自分の子供に接している様に、優しい目をしながら。

「寒いでしょ？温かいミルク入れてあげるからね。」

その間何度も母さんに話しかけても、やつぱり返事は返りない。視線すら合ひ事も無かつた。

（なんか悪いことでもしたつけ…）

悪戯したとか、言いつけを聞かなかつたとか？  
それで怒つて無視しているのかもしれない。

でも、オレには何も思い出せなかつた。

ソファーに戻つて考えていると、前に座つた女の子の前にだけホットミルクとクッキーが置かれた。

オレに原因があつて怒つていたとしても、ここまで差別するなんて

呆れる。

隣に居る母さんは相変わらずオレの方を見ない。いい加減話しかけるのも馬鹿らしくて、オレももう何も言わなかつた。

しばらくすると、それまでじっとオレ達を見ていた「蘭」がぽつつ、と呟いた。

「ねえ……どうして怒つてるの?」

「……え? やーね蘭ちゃん。私、怒つてなんかないわよ?」

「でも。無視されてかわいそつ……」

彼女がオレを指差すと、やつと母さんと目が合つた…

気が、した。

……変だ。

確かにこいつを見ているのに、どうか視線が合わない。

まるでオレを突き抜けて、向こう側を見てこる様に。

「……蘭、ちゃん? 誰が可哀想なの?」

母さんの声は微かに震えていて、でも笑顔を隠せない問いかけた。  
蘭の答へに、何かを求めてこねむつ。」

「わたしと回り歩いてる、おとといの」。

「…蘭ちゃん、おの子が見えるの？」

「うさ。おかあさんばかりと話しかけてたよ。」

母ちゃんはじつ、ホレの方を躊躇しながら見つめていた。

「…おの子の妊娠、聞けぬかな？」

「…んとね…しんこち、だつて。」

瞬間、母ちゃんの場に泣き崩れた。

初めて見たその姿にも動搖したけど、われよりも訳が分からぬ。

とにかく、泣いている原因が自分なら「泣く必要なんて無い」と伝  
えればいい。

そう思つて、手を伸ばした。

だけど。

母さんの肩に触れたはずの右手は……空を切つた。

（……なん、だ？いまの……）

一瞬で血の気が引いた。

よく分からぬ、分からぬけど……何度やつても結果は同じだった。

何かが今までと違つ。でも、何が？

頭に浮かんだのは父親だった。

世界的有名な推理小説家。様々な事件に詳しい彼に聞けば、何か分かるかもしれない。

すぐに受話器をとり、父さんの携帯に電話をかけた。手が震える。自分の体じゃないみたいに。

何が起きているのか早く知りたかった。

『……はい、工藤です。』

「どうさん？！大変なんだ…おれ…」

『…もしもし？』

「モレーヌ…おれだよ、新ーー」

『…おかしいな…もしもし？』

「どうさんまで…モレーヌ…ないの？」

乱暴に受話器を置くと、玄関を開けて傘もわざずに飛び出した。

誰でもいいから。

早く誰かに冗談だつて言つて欲しくて。

父さんと母さんが、一人揃つて驚かせようとでもしてんのんだ。  
誰か他の人に会えば、きっと否定してくれる。

… そう、思ったのに。◦

「「つん、 だる…？」

本当なら今頃ずぶ濡れで、水溜まりも気にせず走り抜けてるはずだ。  
だけど田の前に広がる光景は、さつきまで居た家の中だった。

「……どうなってんだよー。」

何度も扉を開いても、どうしても……外に出られない。

どれだけ繰り返しても結果は同じで。

募る苛立ちと不安で、頭が変にならうだつた。

「ねえ。だいじゅうぶん……？」

「…………。」

……そうだ。彼女は確かに。

「なあ……おれのこと、みえてる……？」

「え? うん。みえてるよ?」

「声も、わかるんだよな……?」

「わかるよ。」

蘭に、手を差し伸べた。

彼女は何も理解していなかつたけど、黙つてその手をとつ、握つた。

やつぱり。蘭にはちゃんと接する事が出来る。  
でも彼女は、普通に母さんと会話が出来る。

…つまり、おかしいのはオレだけだ。

あれから何日経つたんだろう。

どれだけ経つても到底受け入れられるはずが無い「事実」。

左胸に手を当ててみても何の鼓動も感じない。

自分の姿は鏡に映らない。

『眠る』『食べる』など、日常の行為も必要無くなつた。

やつきました蘭の友達にもオレの姿はやつぱり見えなくて。

つまりオレは、両親以外の人間にも認識されない存在。  
それが今日はつきりと証明された。

だけど、蘭があまりに普通に接してくれるから余計に信じられなく

て。

彼女と居る時だけは、自分が普通じゃない事を忘れていたから。

「ねえ… しんいち？」

友達の事で気を悪くしていいか、と聞いたそうな顔。

無理して笑顔を見せる彼女は、何故か自分の事の様に辛そうだった。

「気にすんなよ。 そうだろうなって思つてたから。」

「…わたししか、一緒にあそべないんだね…」めんね。

「しか、じゃねえよ。」

「え？」

「蘭がいてくれて… よかつた。」

蘭が居なかつたら。

オレは完全に一人で、この世界に取り残されていた。

想像するだけで怖かつた。

誰にも認めてもらえないくて、話す相手も居なくて。

これから何をしたらいいのかも分からなくて、ただずつと一人で「存在」だけはしてなきゃいけないなんて。

理由は分からぬけど、世界でただ一人だけ自分を見ていてくれる蘭。

オレにとつては、これ以上無い救いだった。

（…でも、これからどうすればいいんだよ…）

蘭の話で事情を知った両親は「蘭さえ良ければいつでも遊びに来て欲しい」と彼女に鍵を預けた。

二人は父さんの仕事で留守が続いている。

蘭は毎日遊びに来るけど…このままいつまでもずっと、彼女を引き留めている訳にもいかない。

これから的事は、自分で何とかするしかない。

それが、例え死ぬほど辛くとも。

一人なんてすぐ慣れる。

そう自分に言い聞かせた。

「あのや…もう、大丈夫だから。」

「え？」

「もう、ここへは来るなよ。普通のともだちと遊んだほうがいいだろ。」

「…しんいち？」

本当は誰かに傍に居て欲しい。だけど弱い自分は誰にも見られたくないかった。

物心ついた時から両親は多忙で、幼いながらに「良い子で居なきゃ駄目だ」と思い込んだ。

もつとしつかりして、我慢言つたり絶対しないつて。

何があつても絶対、人前では泣かない。

それは自分で決めたルールだから。

でも蘭は帰ろうとはしなかった。

「…ダメ、だよ。」

「なにがダメなんだよ？」

「わたし…決めたから。」

彼女は笑った。

何の迷いもない笑顔で。

「しんいち。約束、しよ？」

「…やく…そく…？」

「うん。あのね…」

言いながら、彼女は左手の小指を差し出した。

あの日から、ずっと。

オレにとつて蘭の存在がどれだけ大きいかなんて、表現出来ない。

絶対大切にするつて思つたんだ。

それが出来るつて、まだどこかで信じてたから。

蘭と交わした約束が、彼女を繋ぐ枷になるなんて思つていなかつた。

## 7（ふたりの約束）

人の『じいじ』は変だ。

いくら強く想つても、願つても、必ず薄れて忘れてしまう。  
人の頭の中には最初からそういう機能がついてるから、どんなに逆らつたって無理なんだ。

身体が離れている限り永遠には一緒に居られない。  
だけど人は皆、それでも何とか誰かと結ばれたいと願つてる。

”約束、しょ？”

彼女の提案、それは。

無理矢理『じいじ』を繋ぐ為の手段だった。

## 7（ふたりの約束）

「わたしは、これからも毎日ここへ遊びにくる。」

「…………。」

「” shin'ichirō を一人にしない” … これが、わたしの約束。」

「… なんだよ、それ？ 後でいやになつてもしらねえよ。」

「 ならないもん。」

「 … だけど…」

「 もう決めたの。だから、 shin'ichirō もなにか、わたしに約束して？」

今思えばそれは、約束と言つたの” 誓い” だ。  
どうして突然言い出したのかは分からぬけど、彼女の笑顔は揺る  
がなかつた。  
何かを決意したような真つ直ぐな眼差し。

不安定な自分には、たつたひとつ道標に思えた。

自分自身にかける誓いなら。  
オレは蘭に何を約束できる？

今の自分には何も残つていない。

… それならせめて、ずっと此処へ来てくれると言つた彼女の為に。

「じゃあ…」勝手に蘭のまえからいなくならない”って約束するよ。

「

「え？」

「自分がどうなるかなんてわからないけど…もし、消える時がきたら。その前に必ず蘭に話すから。」

「しんいち、いつかになくなっちゃうの？」

「…わかんね。でも、人間だつていつか死ぬだろ。」

「…じゃあそれが、しんいちの約束。」

そう言つて、お互いの小指を結んだ。

たぶん、本当に理解出来てなかつたと思つ。子供だつたし、現実に”死”について考えた事なんか無かつたんだから。

でも、蘭は指を離さなかつた。

「蘭？」

「…ねえ、もうひとつ約束しようよ。ふたりで守る約束。」

「ふたりで？」

「うん。 なにかないかなあ？」

「なにかつて言われても……おれ、なにも……」

「じゃあ……ねがい」とはないの？それを一緒にかなえるのー。」

「ねがい」と…？」

もしも、本当に呑うんだったら。

だけどそんな事、望むだけ無駄だ。

言葉にしたつて虚しいだけで、蘭を困らせるに決まつてゐる。

ふと、窓の外を眺めた。

オレはこの家から外に出た事があつたんだろうか。

目覚める以前の記憶が無いから、此処から外の世界がどんなものか分からない。

見える景色は四角い枠に切り取られていて。

「なんでもいってよ。わたしがかなえてあげるからー。」

蘭は優しく微笑んだ。

彼女の言葉は、いつだつて本当に優しかつた。

その笑顔も、声も。今では絶対失いたくない。

あの日から蘭が居たから、オレは自分を失くさず居られたんだ。  
彼女が居なくなつたら……そんな事、想像すらしたくないくらいに。

……たぶん初めて逢つた時からずっと。

オレは、蘭の事が……。

「……そ、う。」

「……え？ な、に？」

「……そ、ら、が、み、て、み、た、い。」

「わ、り、? わ、り、な、ら、ど、こ、か、り、で、も、み、え、る、よ、?」

不思議そうに首を傾げた彼女は、窓を指差した。

普通はそうだ。

区切られていない空を何の意識もしないで見ていられたら、オレだつてきっと分からぬ。

ずっと疑問だつた。

この枠を含めた景色しか知らないはずなのに……果てのない空を見てみたい、なんてのも変な話だけど。

いつか、蘭と同じ空を見られたら…

そう思った。

数日後。

いつもより遅い時間に来た蘭の様子は、少し違っていた。

「あ、 shinichi...」

「どうしたんだよ、その荷物。」

小さな体に両手いっぱいの大きな袋を下げる蘭が、よたよたと近づいてくる。

一度袋を床に置くと一息ついて、オレに笑いかけた。

頭には少し雪が積もっている。

「ねえしんいち。 もうつま、ずっとホームズよんでって？」

「は？ なんで？」

「いいから、ね？」

やつぱつた蘭に背中を押され、父さんの書斎に押し込まれた。

「おい？ なにするつもりなんだよー。」

「ひ・み・つーあとで教えてあげるから……」

勢い良く扉を閉め、走り去っていく音が聞こえる。

その後は静まり返り、廊下の様子を見ても変わった様子は無かった。

「……なんなんだよ、つたぐ。」

仕方なく、読みかけの小説を手に取る。

昔は難しい漢字は読めなかつたから、その度に辞書で読み方と意味を調べていて、1冊読み終えるのには相当時間がかかっていた。

それでも謎を読み解く様な感覚で楽しくて、蘭が居ない間はずつと本ばかり読んでいた。

本当は蘭と居た方が楽しいんだけど……

( ネットにえればわつか… 蘭の頭に雪、積もつてたな。 )

ふと思い出してカーテンを開けると、薄暗いグレーの空に粉雪が舞つてゐる。

色とりどりの屋根に薄く積もり、見慣れた景色は違つ街みたいたつた。

向かいにある変わった形の家。

あれは確か子供の玩具とかを発明している科学者の家で、個性的な飾りが施されている。

その飾りの一つに刻まれた文字。

「めりー…くります?あれ、今日つて何日だっけ…」

眠らなくなつてから時間の感覚が無くなつていた。  
壁にあつたカレンダーを眺めて、数えていると…

「?…なんだ…?…」

どこからか、もの凄い音がした。

何かが倒れて引っくり返つた様な音。

過ぎたのは蘭だった。

「おー蘭？！何かあったのか？！」

廊下から呼びかけると、向こうの部屋から蘭が顔を出した。  
その部屋は子供部屋…つまり、オレの部屋だ。

「だ、だこじょうぶだからー！」

「ほんとこ向こうやつてんだよ？ー。」

彼女はその問いに答えず、すぐに部屋の中へと消えてしまつ。  
駆け寄つて扉を引いても開かない。

「蘭、あけろつてー！」

「だめー…もうちょっとまってー。」

あまりに必死な彼女の声。

オレはそれ以上何も言えずに、仕方なく手を離した。

… それから書斎に戻つて、もうだいぶ時間が経つてゐる。

蘭が考へてゐる事が全く理解出来なくて、オレは溜め息ばかりついていた。

せつかく会えたのに別々の部屋で何してんだか… 意味が分からなくて笑えてくる。

すでに沈みかけの夕陽。

白い景色が朱あかく染まり、所々でイルミネーションが点灯し始めた。

（蘭のやつ、さすがに終わつたかな…）

彼女が居る部屋の前に立つて、そつと中の様子を探つてみた。  
物音はもうしない。

恐る恐る扉を引くと、鍵は開いていた。

「…ひん？」

返事は無い。

しん、と静まつた部屋は、開け放たれたカーテンから夕陽が差して  
いた。

その光景に思わず声を失つ。

「…え。」

広がるのは、大きな空だった。

真っ白で何も無かった天井に、青空が描かれている。

夕陽に染まつて、まるで本物の空みたいで。

「すげえ…」

思わず呟いた言葉は本心だつた。

大きな太陽と、様々な形に沢山描かれた雲。

今まで、じつして空を見上げる事なんて出来なかつたから。

視線を落とすと田に入るのは、床一面に散らばつた水彩絵の具。沢山の筆と、引っくり返つた筆洗器。

そして天井まで届く高い脚立。その傍には眠つてゐる蘭の姿があつた。

「ん…しん、いち?」

「蘭…これ…」

「…そら、みてみたいつて言つてたから…」

蘭は目を擦りながら起き上がった。

服も顔も絵の具が付いていて分かりにくいけど、頬を怪我していくて膝に痣がある。

もしかしたら脚立から落ちたのかもしれない。

…どうして、そこまでして?

あんな願いを叶える為に。

「しんいち。きょう、何の口だかしつてる?」

「え?」

「クリスマスはね、プレゼントがもらえるんだよ。だから…しんいちにあげる。」

言つてしまえば、所詮子供の落書きかもしれない。

だけどオレには充分過ぎた。

代わりに彼女にあげられる物なんて何も無かつたけど…

少しでも感謝の気持ちが伝わるよ。アリス。

「ありがとな、蘭。すげえうれしいよ。」

「どういたしまして。」

蘭も満面の笑顔で答えた。

「こいつか、いつしょこみよひ? ……もつとおおあこがひ。」

「…そ、だな。いつか絶対、いつしょこみよひ。」

「じゅあこれが、ふたりの約束ねー。」

それくらいなら、きっとこいつかは叶えられる。そう信じた。  
田の前は真っ暗で何も見えなかつたから。

…本当はそんな約束すら叶れないって。

「…これ…かあさんがみたら怒るかもな…」

「…く…せっぱりだめ、だつたかな…?」

まだ何も知らずに、ふたりで笑い合っていた。

## 8 (彼の気持ち)

「いつか一緒に本物の空を見よっ」

そんな些細な事すら叶わないまま月日は流れ、蘭は中学生になつた。制服を着た彼女は急に大人っぽく見えて。

：あの時交わした約束に迷い始めていた。

学校帰りに毎日ここへ来る蘭は、部活や遊びも我慢しているのかもしれない。

普通の生活を犠牲にしているなら、そんなの本当に幸せなはずないつて分かってるのに。

「もう来るな」とは言えなかつた。

オレは彼女に会いたかったから。

## 8 (彼の気持ち)

「新一。今日…泊めて。」

「…は？」

「こんなに沢山部屋があるんだから、ひとつくらい借りてもいいでしょ？」

「いや、そういう問題じゃなくて…何かあったのか？」

その日は彼女の様子が変だつた。

ソファーに座つていたセーラー服姿の蘭は、膝の上の掌を固く握り締めている。

下を向いたままで、その表情は読めない。

けど「帰らない」意思を断固譲る気は無いらしい。

「…お父さんなんて…だいつ嫌い。」

ぽつり、と呟かれたその一言から、何となく理由を察した。

蘭と彼女の両親は昨日、久しぶりに3人揃つて食事をすると云つていた。

（両親は彼女が小学生の頃に離婚していく別居中）

恐らく父親が原因で母親と喧嘩か…まあ何かしら起つて、最悪な

食事会になつたんだね!…

昨日ここから帰るまでは、「これからお母さんと会える」と本当に嬉しそうだったから。

「お父さんと顔合わせたくないの。」

「でも、中学生が帰つて来なかつたら心配するつて。」

「…こ、そのくらい。一人で頭冷やして欲しいから。」

「後ですげー怒られるんじゃねえの?」

「い、いってば。…新一は…迷惑?」

上田遣いに睨んだ瞳に涙が浮かんでいる。

ここまで頑なになつてしまつと、さうと此処から無理やり追い出しても家には帰らない。

「…わーつたよ。でも電話はしろよ。」

「…うる。」

渋々承知した蘭は、受話器をとつた。

父親は外出中なのか留守電らしく、「今日は友達の家に泊まる」とだけメッセージを吹き込んでくる。

場所を伝えないのはせめてもの反抗なんだと思つ。

しばらく背中を見せたまま突つ立っていた彼女は、振り向いた時はいつもの笑顔だった。

突然何かが吹っ切れた様に、声のトーンも元通りになつている。

「新一！今日は朝まで遊べちゃうね！初めてじゃない？」

「え？あ……蘭が寝なきやな。」

「寝ないもん！楽しみだね」「

蘭が楽しそうなのはいいけど……微妙に複雑な気分だ。

（本当に何にも意識してねえ……）

「へ？何か言った？」

「……なんでもねーよ。」

一方通行だから。そんなの分かりきつてた。

「でね…園子は〇組の男の子がカッコにって、いつも話してて…」

時刻は〇時を過ぎていて。

眠くなるどころか余計元気になつた様にすら見える蘭は、相変わらず笑顔で会話を続けている。

内容は大半が友達の恋愛話。

オレは他人の恋愛に興味なんて無かつたから、少しウンザリしていて。

かなり無意識に言葉にしてしまつた。

「蘭は学校に好きな奴いねーのかよ？」

「へ？」

（……あ、。）

発した後すぐに後悔した。そんなの別に聞きたくない。

居るつて言われたらどうすんだよ？  
いや、居た方がいいんじゃねーか？

答えの出ない問題がぐるぐる回る。

「…や、やだ。居るわけないじゃない！」

顔を真っ赤にした蘭は、両手を大きく振りながら全力で否定した。

その姿は逆に言えば思いつきつ肯定してゐる。

「さ…急に何言い出すのよ？新一のばか。」

（「ひいつ時に分かりやすい性格つて…）

凶器以外の何物でもない。

彼女が否定すればする程、心臓に突き立てられたものが傷口を抉る様な気がした。

…オレはともかく。

それならそれでいい。蘭の為には良い事だし…

なんて冷静に頭で考えながら、自分でも分かるくらいに機嫌が悪くなつていく。

でも絶対知られたくない。

「…蘭にも好きな奴とか居るんだ。」

「だから居ないつけば！」

「オメー分かりやす過ぎなんだよ。嘘も下手だし。」

「や、そんな事ないもん。」

「認めやつて。」

「…え、どうしたの？何か怖いよ？」

…ダメだ。

何かイライラしていく。

まあ仕方ないよな…

学校に行けば色々な奴と知り合つんだし、いつまでもガキみてーに遊んでばっか居られない。

いつかそつなるんじやないかって覚悟はしてたんだ。

オレは彼女の『幼馴染み』で『親友』なんだから。

「どんな奴？」

「…し、新一になんか教えない！」

「”幼馴染み”として心配してやつてんだよ。」

蘭は俯いて黙つた。

しばらくすると真っ赤になつた顔を上げ、オレの正面に向かって  
座り直した。

何となくオレまで身構えてしまつ。

「……し、新一の言つ通り。居るよ、ほんとは……好きな、ひと。」

（……自分で聞いた癖に。やつぱ聞きたくなかったな……）

オレが”ふつう”だつたら迷わず蘭に気持ちを伝えたし、他の奴に  
なんか絶対渡したくないのに。

でも、それは出来ない。

今までどうしても言えなくて、これから先も伝える気なんか無い。

彼女を繋ぐ枷は、あの約束だけで充分重過ぎる。

「那人…意地悪だけど優しいの。素直じゃないけど…本当は可憐  
いところもある人だよ。」

「…はあ？何だよそれ。ただの強がりじやねえか。」

「うん、そうかも。でも…辛い事や苦しい事があつても、絶対に他<sup>ひ</sup>

人には見せないの。それって本当に優しくて強いって事だよね？」

「…ビーだかな。」

「私は、もつと彼に弱い所も見せて欲しいんだけど…私じゃ頼りないのかな。」

蘭が”そいつ”をどれだけ好きなのかなんて、顔を見れば分かつてしまつ。

それくらいに優しくて、寂しげな笑みを浮かべていた。

（マジで聞くんじゃなかつた…）

思わず視線を逸らした。

目が覚めた時からずっと一緒に居て、この世界で存在を認めてくれたのは蘭しか居なかつた。

最初は誰でもいいから傍に居て欲しいと思つたし、もしかしたら蘭じゃなくても『幼馴染』や『親友』として心は許せたのかも知れな  
い。

それは否定しない。

…だけど、違う。

今まで自分が彼女をどれだけ想つていたか思い知らされる。

「……本当に好きなら、伝えた方がいいと想ひやが。」

「…………え？」

「伝えたくても伝えられない奴だつて居るんだし。」

「それつて……どんな？」

「普通それ聞くのかよ？」

思わず本音を言いそうになつて、慌てて取り繕つた。

「んなの色々あるだる。言いたくても言えない、めんどうせー理由  
がある奴はいくらでも居るんだよ。」

「……そりかもしれないけど……」

「だから頑張れよ。……応援、してやつか。」

「……うん。わかつた。」

「……有り得ない。」

「応援なんか出来る訳ない。」

「だけど蘭が幸せなら、一人になつたつていい。」

今まで充分過ぎるくらいに楽しかった。それが特別だつたんだ。  
全てが在るべき状態に戻るだけ。

（なのに、どうしてこんなイラつくんだ…）

油断したら本音を言つてしまいそうだった。

これ以上彼女が近くに居たら離したくなくなる。

冷静になれない自分が情けなくて頭を抱えた。

「…新一？」

蘭の声に顔を上げると、何故か彼女が隣に座つて覗き込んでいた。

少し赤面した彼女が近くて、自分まで体温が上がつた気がする。

「…？…な、んだよ？」

「新一は…その…別に何とも思わないんだよね…？」

「え？何を？」

「わ、私が誰かに好き、とか…そういうの聞えたりする」と。

（……は？）

…一瞬、彼女が何を言つてゐるのか理解出来なかつた。

ただその間、蘭をぼーっと眺めていて……。

彼女の表情や、仕草。

たぶん目を逸らしたくて仕方ないくらい恥ずかしいのに、精一杯見つめてくる瞳。

「嫌だとか、思つたり……しない、よね?」

彼女の「好きな人」。それが誰だか分かつてしまった。

(嘘、だろ……どうすればいいんだよ……)

思考をフル回転させても答えは出ない。

感情で言つてしまつたら、きっと後悔する。

だけど、彼女を他の男になんて渡したくない。  
本当はずっと傍に居て欲しい。

なり、「あれ? へ、いつてこえぱたつたの一文字の、その意味を。

また、増やすのか?  
する事すら出来ない約束を。

……やつぱり、言えない。

なのに蘭を弓を寄せていた。

「…………」あんな、蘭。

「どうして謝るの?」

耳元で聞こえる蘭の声は、少しだけ震えていた。

彼女の華奢な体は凄く熱くて、どれだけ懸命に想いを伝えようとしてくれたかがよく分かる。

「…………すき。 だいすき…新一。」

それなのに、どうしても答えられなくて。  
代わりに強く抱き締めた。

「彼女の為に」駄目だつて分かつてるのに離したくない。  
「自分の為に」離したくないくせに、たつた一言が言えない、なん  
て。

都合がいいよつて、綺麗事ばっかだな。

矛盾してる。

.....  
最低だ。

## 9 (彼と彼女の相違)

頭では理解しているはずだった。

彼の本心じゃなくして、きっと私の為に” 言ってくれた” 言葉なんだ  
つて。

…それでも。

「どう、じ…？」

本当の気持ちを教えてくれないの？

いつも、いつも…

そんなに私は頼りない…？

私なんかじゃ弱音を吐きそうって思つてゐる…？

全然分かつてない。

私一人は弱くても、貴方が居れば強くなれるのに。

先の事なんて考えなくていいから。

”ずっと傍に居て”って、そう言って欲しかった。

溢れ落ちる事が世界を滲ませていく。

こころが離れる事が、こんなに苦しいなんて知らなかつた。

## 9（彼と彼女の相違）

『久しづりーほんまに電話くれたんやねー！』

「久しづり、和葉ちゃん。」

『蘭ちゃん、風邪？鼻声やで？』

「大丈夫…ありがと。…ちよつとお願いがあつてね…」

家に帰る気分にはなれなかつた。

新一の家を飛び出してから、どれくらい経つんだろう。

すっかり陽の落ちた公園のベンチは冷たく冷え切っている。

晴れ渡った夜空は星がよく見えて、余計に胸が締め付けられた。

いつからだらう。

私は空を見上げるのが癖になっていた。

その度いつも、彼を想つて…

”いつか一緒に本物の空を見よう”

あの約束がある限り、繋がつていられる信じていた。

やつと止まつた涙が、またじわり、と滲む。

『お願いって?』

「…あのね、…」

「聞きたいの。新一の本音。」

「…急にどうしたんだよ？」

…ついに聞いてしまった。

聞きたくて仕方なくて、それでも聞きたせずにいた”彼の本当の気持ち”。

緊張のせいか、少し体が震える。

心臓がどきどきして、呼吸が苦しくなる。

最悪の返事が頭を過ぎって、その度「そんな事絶対無い」と頭から振り払った。

…怖い。

怖いけど、まだどこかで信じていた。

「んな怖えー顔すんなよ。」

「…誤魔化さないで。」

あくまで笑顔を崩さない彼。

きっとまた、どうにか曖昧にするつもりに違いなかった。

私も、ほんの少しだけ決意が揺らぎそうになる。

今笑つて”冗談だよ”って言つてしまえば、明日からも今まで通り一緒に居られる。

「好き」だなんて言葉で聞けなくとも、私が彼を好きだから。自分が好きな人と一緒に居られたら、それで充分じゃない…？

もし彼の口から一番言つて欲しくない言葉を聞いてしまったら…私はもう笑えない。

だけど…

新一が私の事、本当に想つてゐて言つてくれたら…これから先、何があつても強く居られる。

死ぬまでずっと新一と居たい。新一が望んでくれるなら。

周りの事とか、私の将来とか…そんなの何も考えなくていい。

だから…言つてよ。

「…………。」

「答え、られない……？」

新一は気まずそうに口を逸らした。  
その仕草に胸が締め付けられる。  
彼の表情が見えない。

どうして……？

私はこんなに、新一だけを見てるの？」

胸の中で、どろどろした嫌な感じが渦巻いてる。  
……泣き声になるのを、唇を噛み締めて堪えた。

「こんな事言いたくないのに。」

「……私しか居なかつたから？だから、仕方なく、なの？」

「……蘭、」

「抱き締めてくれるのも、キスしてくれるのも、全部、私の為」？  
私が新一を好きだから……？」

「いや……」

「新一は……誰でも、良かった？私じゃなくとも……」

……止められない。

彼にぶつける不安も、流れ落ちる涙も。

言葉を濁す彼に、こんな事を言いつ放つ自分自身に、イライラする。  
たくさんの想いが込み上げてきて、いろいろの整理が出来ない。

こんな事聞いたって、彼は答えてくれないって知ってるのに。

どうしても怖くて。

心の何処かで、ずっとずっと怖くて。

彼と出逢った日。

彼と約束した日。

彼に「すき」と云えた日。

彼と一緒に過ごしてきた、今までの日々、全部。

楽しくて仕方なくて、嬉しくて、幸せで…  
その分、いつか失うのが怖かった。

新一は私から離れようとしてる。  
それに気付いてたから。

「…蘭。」

新一は、きつとこの日を待つてたんだ。  
私がいつか不安に耐えられなくなつて、いつして弱音を吐く口を。

「…ありがとな。」

だから、彼の答えは。

「オレはお前の事、幸せになんて出来ない、から。」

私だつてそれを分かつてはいたはずなのに…

「…もう、来るなよ。今までほんと…ありがとうございます。」

彼が選んだのは、お別れの言葉。

それなのに、私達はお互い笑顔だつた。

「…優しいね。新…。」

「…何処が。」

「優し過ぎるなよ…」

新一は何も理解しない。

私の”幸せ”は私が決めるものなのに。  
私にとって彼が居ない世界なんて有り得ないのに。  
自分が居ない方がいいと信じきってる。

彼は今まで、きっと凄く苦しんで、悩んできた。  
顔や言葉に出さない新一の、本当の気持ちまでは分かつてあげられ  
なかつたかも知れないけど…

その彼が出した答えは、彼にとっての唯一の結論。

そう思つと、それ以上何も言えなかつた。

「…ひとつだけ、聞いてもいい…？」

「…ああ。」

「私の事…嫌い、だつた？毎日来るの…面倒だつて思つてた…？」

「…嫌い…なワケ、ねーだろ…」

嘘でもいいから、嫌いって言つてくれればいいの…。

…ほんと…ばか、なんだから。

「”約束”…解消、しようぜ?」

まるで”あの日”みたい。

一人でお互いの小指を絡めて、誓う。

”あの日”と違うのは、私の頬に伝づ涙。

そして『いじり』を繋いだはずの”約束”を、解く為の”誓い”であること。

無理矢理繋いだつもりでいたのに。  
ずっと繋がつて居られると思つたのに。

…やはり、

解けた。

## 9（彼と彼女の相違）（後書き）

『空の落書き』を閲覧していただき、ありがとうございます。

実は2日に1回更新という隠れた法則で連載していたこのお話なのですが（それに気づいていた方が居たかも不明ですが）作者が今週末に向けて多忙の為、次回更新は少し遅れる予定です。もし、毎話読んで下さっている方が居たとしたら（居るのかも不明ですが）すみません。

遅れる、と言つても今週末か来週始め位には更新出来ると思います  
…きっと。

『空の落書き』は今の所、中盤～後半へ向かっています。新一と蘭の約束の行方や平次の謎（笑）など、もうじきお付き合いいただければと思います。

綾瀬

## 1-0 (シャツカの心理)

変わらない日常。

いつも通りの時間に起きて、学校に着いたら授業を受けて、親友達と他愛ない会話で笑い合つ。

空を見上げない様に意識して、常に下を向いて歩いた。

それなのに、元気にして離れてくれないんだもん。

いつも同じかで想つてしまひ。

通学路の歩道橋。

学校の渡り廊下。

夕暮れの帰り道。

ふとした瞬間に、胸が締め付けられる。

彼はどこにも居ないのに。

”…逢いたいよ。”

「大丈夫？」

「「「めん……園子。」」

4限目の体育の時間。私と蘭はジャージ姿のまま、保健室に居た。

顔面でバレーボールを受けた親友の鼻の頭に、絆創膏を貼つてやる。その姿はちょっと情けなくて、でも何だか可愛いらしくて笑えちゃう。

「まだボーッとして……じりせ”彼”の事考えてたんでしょう？」

「ち、違つわよ。」

「じゃあ何考えてたの？」

「……今日の夕飯、何作るうかなあつて。」

「相変わらず嘘が下手なんだから。そんなんで運動神経抜群の蘭が、こんな怪我するわけないじゃん！」

「ひつと強めに反省を促すと、蘭は肩をすくませて俯いた。

彼女は最近、こんな事ばかり。

階段から足を滑らせて怪我したり、ドアや壁にぶつかったり…  
小さなものまで含めれば、もう数え切れないくらい。

「まさに、心此処に在らず”って感じよね…」

「…やう、かもしれない。」

原因は分かつてゐる。

最近聞き出した”彼”のこと。

数日前に「本当に好きなのか聞いて来なきやー」と私が言つ出したのが全ての始まり。

話によると、結局”彼”から別れを告げられてしまつたらしく…  
蘭は「自分も聞きたかったから園子のせこじやない」と言つたけど、  
やつぱり私は責任を感じていた。

だから蘭には笑つていて欲しくて。

落込んだ彼女に気付いても、常に明るく振舞つていた。

「でもや、今度の休みは例の彼が来るんでしょ？」

「え？ ああ… 服部君ね。」

「」の際、彼に乗り換えちゃえば？ 彼、中々イケメンじゃない

「やだ、そんなんじゃないよーそれに服部君には、可愛い幼馴染み

が居るんだよ？」

「なんだ、 そうなの？ 電話で呼ぶだけで大阪から来てくれれば、 なんて、 てっきり蘭に氣があるのかと思ったのに。」

本当は… 少しマジに期待してたんだけど。

新しい恋をすれば、 蘭も元気出るかも知れないって。

「それは… ちょっと、 理由があつて。」

言葉を濁した蘭は、 その先を言つべきか迷つて いるみたいだつた。俯きがちに視線を泳がすと、 何かを決意したように真っ直ぐ私を見つめる。

「… 信じてくれないかもしないけどね。 私、 本当は探偵なんか出来ないの。」

「へ？」

「今まで事件を解決してくれてたのは、 全部”彼”。 私は彼の推理を、 自分の推理の様に話していただけで… それはもう、 続けられな いから。

服部君を呼んだのは、 その事で… なの。」

「… ？ ？ ？ ？ ち、 ちょっと待つてよ。 もし本当に そ うなら、 今まで何の為に蘭が探偵やつてたわけ？」

「……話すよ、全部。やつぱり園子に隠し事してるの辛いもん。信じられない様な話だと思うんだけど……聞いて、くれる……？」

蘭の真剣な表情かおに、私は覚悟を決める。

彼女がこれから話すことが何であろうと、受け入れるつて。

親友、だから。

……だけ。

「……頭が混乱してきた。つまり……その”新一君”って……」

全てを聞いてみると、それは想像以上に現実離れしていた。

「怖く、ないの……？だって蘭、そういうの一番苦手じゃない！」

「……全然怖くなんかないよ。新一は新一だもん。初めて逢った時から、ずっと……」

普通なら絶対信じられない。

それどころか、この人アタマ大丈夫なわけ?とか騙そうとしてるんじゃないの?とか疑うと思う。

でも、蘭はそんな奴じゃない。

ずっと見てきた私には分かる。彼女は嘘なんかついてない。

それは頭では理解出来るんだけど…

「やっぱ…信じられない、よね?」

「…うん…正直言うとね。まだ受け入れるのに時間がかりそうって…」

「…変な事言つて…めん。今、忘れて…?」

( あれ? )

この感じ。前にもこんな事があつた様な…

” 何でもない…きょうは留守みたいだね。 ”

ずっと昔、蘭はそう言いながら今みたいに笑つた。  
…いつだつたつけ?

でもあの時も、凄く悲しそうで…

何だかは分からない。

でもそれが過った瞬間、不思議と私の心は決まった。

「確かに信じられない様な事だけ…でも私、蘭の事は信じてるか  
う。」「…え？」

「蘭がそう言つながら信じるってコトよ。今まで蘭が私に意味無く嘘  
ついた事なんて無いもの！」

「…ほ、ほんと…信じてくれるの？」

「もちろんよ！それなら”新一君”が蘭に”好き”って言つてくれ  
ないのも納得だしね」

「…だったら尚更”彼”には悪い事をしてしまった。

…言いたくても言えない理由があつたのかも知れないのに…

「でも蘭なら彼の意思を変えられるんじゃないの？それだけ好きな  
んだからさ。」「…

「新一は…強いから。私がどんなに好きで居ても変わらないよ。」

……分かつてないんだから。

「……馬鹿ねえ。」

「へ？」

「強く見える人の方が本当は脆いのよ。」“自分が弱い”って分かつてる奴ほど実は強かで世渡り上手、つてね。家柄のせいで色々なトコのお嬢様達に会つけど……そんなもんなのよ？」

人を変えられるチカラがあるのに、気づいてないなんて、ね。

「”工藤”……この家かあ。」

人を受け付けない雰囲気の、威圧感のある洋館。  
噂では聞いてたけど、まさかこんな住宅街にあるなんて予想外だつた。

初めて来た…はず、なんだけど。

(ん…?此処つて前に一度…)

来た事があるかもしねりない。

確か小学生になるかならないか、くらいの子供の頃。

蘭に連れられて…

何でだつた?

肝試し、とか?

…いや、違う…。

(待てよ…確か蘭の彼は”新一君”…。あの時も確か…)

”ねえ園子ちゃん！あたらしい友達ができたから紹介するね！”

“『つてこのの…』”

「…………！」

そうだ…蘭は言った。

”『しんいち』ってこのの…”

「…………#じっ！」

靈がかつていた記憶が晴れると、自然と体が強張つた。  
鳴らそうとしたインター ホンの前で指が止まる。

私には誰も見えなかつたから、聞いた。  
誰と話してゐるの?つて。

そしたら蘭は驚いた顔して、寂しそうに”何でもない”つて笑つた。

”今日は留守みたいだね”つて…

「…お、面白こじやん…」

この肌寒い中ブレザーを腕捲りして氣合いを入れた。

「お邪魔しまーす…」

呼び出しても誰も出なかつた。

運良く鍵は開きっぱなし。

薄暗い玄関。

広くて長い廊下やリビングも人の気配は無い。

（中は綺麗なんだ：かなり広いし。ま、うちにはあるけど。）

無意識に忍び足になる。

誰も居ないらしいのは分かっていても、勝手に侵入している罪悪感かも知れない。

階段を昇ると目に入るのは、一つだけ開いた扉。

（わ、凄い数の本…！）

壁一面の本棚は、今まで色んな豪邸へ連れられて来た、さすがの私も初めて見た。

あまりの迫力に思わず足を踏み入れても、もちろん部屋の中にも誰も居ない。

ただ、机の上に開いたままの分厚い本が置いてあって…

それにこの家の中で唯一の「気配」を感じた。

「えーっと…”新一君”？…居るの？」

返事なんかあるハズない。  
自分の声が虚しく響くだけ。

「…まあ、居ると仮定して話すわ。私は鈴木園子。蘭の親友。」

相変わらずしゃんと静まり返った部屋。  
でも…なんだか…誰も居ないのに、独り言な気はしない。  
不思議な感覚。

「まあ、勝手に家に入ったのは謝るわ。けど、開けっぱなしのアンタも悪いのよ?…って、そんな事言いに来たんじゃないけど…」

心に届かなくても、いい。  
それでもいいから、ただ、聞いて欲しい。

「新一君」は、間違つてゐる。」

きつと聞こえている。  
何の確信も無いけど…

もしも本当に”あの時”、”彼”が私の目の前に居たんなら。

今が”あの時”と同じなら…

「蘭の幸せは、蘭自身が決める事なのよ。それはいくら長年一緒に居たアンタだつて、私にだつて決める権利は無いの。そう言つたら『オレの気持ちなんてお前に理解出来るか!』つて、怒るかもしれないけど…」

言葉にする度溢れる、大切な親友への思い。

落ち込んだ顔は、あの子には似合わない。

「蘭の幸せは”新一君”の傍に居ること。アンタが普通だらうと普通じやなかろうと、よ。

ていうか大体ねえ、”普通”って誰を基準に決めるわけ?」

いつもどこか、周りには距離を置かれてた。

遠慮がちに接する表面上だけの”トモダチ”。

私と仲良くすれば得をする、なんて魂胆見え見えのクラスメイト達…心のどこかで違和感を感じていても、常に沢山の人々に囲まれている事に”シアワセ”を感じた。

だけど、蘭に会つてから。  
そんなの自分に嘘ついて、誤魔化して…

目を逸らしていただけだつて、思い知つた。

「本当は親友として少し不安だけど……蘭が信じてるアンタを私も、信じるから。」

彼女は財閥のお嬢様とか、そんなの関係無く私を一人の人間として見てくれた。

間違つている時は怒つて、楽しい時は一緒に笑つて来た……

一番の親友だから。

お願い。

「……蘭の傍に、居てよ。」

それが”新一君”に至ってもシアワセな事なら……

その人にとって何が幸福で不幸か、なんて自分自身の判断でしか無

い。

「 „ シアワセの定理 „ なんて、色々なカタチがあつたつていいんだ  
かり……。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0973y/>

---

空の落書き

2011年11月23日16時54分発行